

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	青森県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	大間町立大間小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	3	2	2	2	2	1	13	17
児童数	37	72	57	52	56	58	3	335	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力向上のための個に応じた指導の研究

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<p>・ 1～6年・算数</p> <p>平成9年度から、5・6年の算数を中心にティーム・ティーチングの指導を取り入れてきた。これは、基礎・基本を重視すべき本校児童の実態から、児童の多様な能力・適正、興味・関心等に対応し、確かな学力を保障する時間を確保し、個に応じたきめ細かい指導を工夫する具体的な手段の一つとして導入したものである。また、実態調査の結果から、1～4年についても基礎・基本の定着が十分であるとは言えず、5・6年のTT学習を含み、全学年でよりきめ細やかに個に応じた指導を行ったり、評価を生かした指導の改善に取り組んだりする必要があると考え、研究する。</p>

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>確かな学力向上のための個に応じた指導の研究 研究の見通し（仮説） TTによる指導や習熟度別学習，さらに評価を生かした指導を実践的に研究することで，個に応じた指導が明らかになり，児童の基礎的・基本的内容の定着が図られ，確かな学力を向上させることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(ア) TTによる個に応じた指導（5・6年算数） TTを取り入れた習熟度に応じた指導や個に応じた指導の実施と教材開発を行う。</p> <p>(イ) 習熟度別学習の工夫 習熟度別の「学習グループ」を編制するなどの学習形態の工夫を図る。</p> <p>(ウ) 評価を生かした指導 確かな学力向上のための適切な評価を行うために，年間指導計画における評価規準を明確にし，客観的な評価の工夫に努める。 学級・学年経営で指導の重点を明確にし，評価・改善を繰り返しながら指導に生かすようにする。</p> <p>(エ) 基礎的・基本的内容の定着を意識した指導過程の工夫 「一人調べ」や「練り上げる」場面を指導過程に位置づけ，学習の仕方を児童に身に付けさせるようにする。 既習事項の確実な定着のために魅力的なドリル的学習を工夫し，取り組ませるようにする。</p>
--------	---

平成
16
年度

確かな学力向上のための個に応じた指導の研究

研究の見通し

TTによる指導や習熟度別学習，さらに評価を生かした指導を実践的に研究することで，個に応じた指導が明らかになり，児童の基礎的・基本的内容の定着が図られ，確かな学力を向上させることができる。

研究の内容・方法

(ア) TTによる個に応じた指導（3～6年算数）

TTを取り入れた習熟度に応じた指導や個に応じた指導の実施と教材開発を行う。

平成15年度までは5・6年の算数であったが，TTによる授業形態でより個に応じた指導ができること，また，学力差が3年生から明らかになっていく傾向があり，この時点での個に応じた指導の効果が期待できることから，3年からTTによる指導を行うこととした。

(イ) 習熟度別学習の工夫

習熟度別の「学習グループ」を編制するなどの学習形態の工夫を図る。

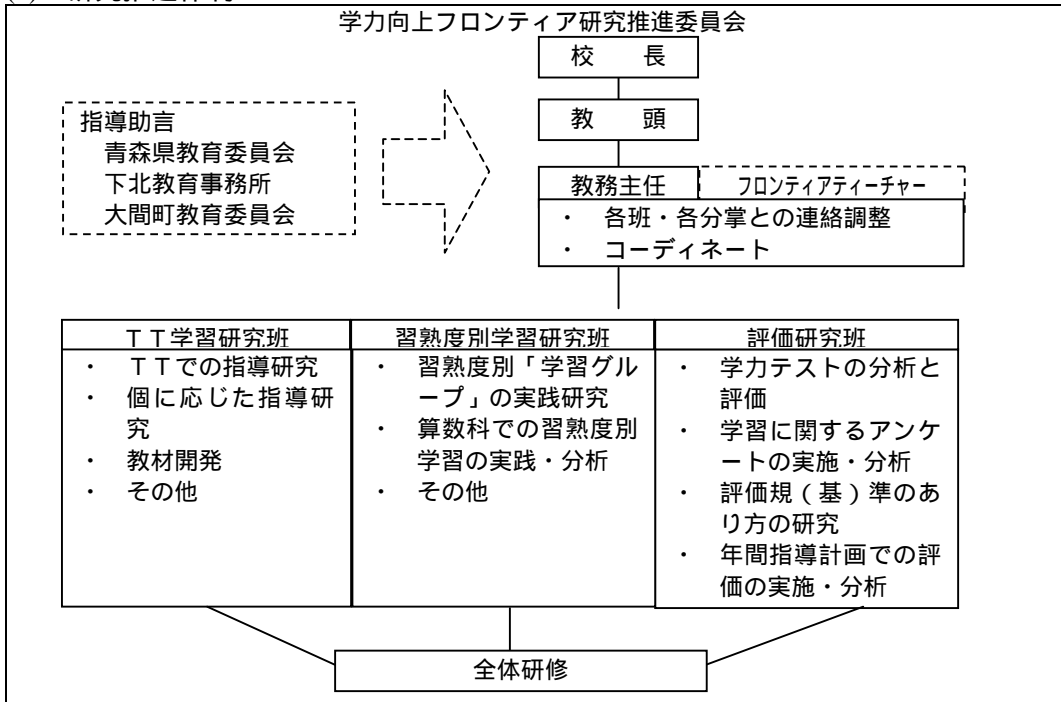
(ウ) 評価を生かした指導

確かな学力向上のための適切な評価を行うために，年間指導計画における評価規準を明確にし，客観的な評価の工夫に努める。
学級・学年経営で指導の重点を明確にし，評価・改善を繰り返しながら指導に生かすようにする。

(エ) 基礎的・基本的内容の定着を意識した指導過程の工夫

「一人調べ」や「練り上げる」場面を指導過程に位置づけ，学習の仕方を児童に身に付けさせるようにする。
既習事項の確実な定着のために魅力的なドリルの学習を工夫し，取り組ませるようにする。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(ア) TTによる個に応じた指導について

- ・ TTの授業で「算数の学習がわかりやすくなった、わからないときに聞ける回数が増えた」などの感想を持つ児童が多くなった。また、TTの個に応じた指導の実践により、自信を持って学習活動を進めることができる児童が多くなった。
- ・ 5年生の「四角形」の評価テストで満点の児童が学級の50%を占め、平均点86点という好成績を残すなど、基礎・基本が少しずつ定着してきている。
- ・ TTの指導研究について、学級の実態に応じた指導形態や指導者の役割分担について研究実践をしてきた。その結果、児童が主体的に学習に取り組むようになってきている。また、支援の必要な児童にとってはすぐに個別指導ができる状態にある。
- ・ 普段の授業における実態把握として、座席表を活用したチェック表を使用した。そのデータ分析について1人の担任が行うよりも、2人で行えるため効率がよく、支援の必要な児童の予測ができる。

(イ) 習熟度別学習の工夫について

- ・ 今年度は3・4年で『コース別学習』という名称で行った。名称については、児童及び保護者の心証へ配慮したものである。3年生については2学級を3つのコース別学級に編制、4年生については2学級を4つのコース別学級に編制した。コースを選択する際にチェックテストを行ったが、結果はあくまで資料とし、児童自身の希望選択を基本とし、自己選択ができるように工夫した。また、コース選択でどちらにいくか迷ったり不安を持っている児童に対応するために、全体にオリエンテーションを行ったり、個別に相談タイムを設け不安を解消したりして、やる気につながるようにした。この方法により、児童からは選択について、自分の希望したコースにならないというような不満が出ていない。
- ・ 単元の指導計画の中で、単元の最後の練習問題をやる段階においてコース別学習を取り入れ、その結果をワークテストの平均点で比較したところ、2つの学年(4学級)でコース別学習を行った単元の平均点が89.1(コース別学習を行わなかった単元の平均点が80.4)で平均8.7上回った。また、コース別学習を行わなかった38単元のうち、コース別学習の単元の平均点を上回った単元は7単元であり、領域の特性などを考慮していないため一概には言及できないが、コース別学習が効果的であるといって差し支えない結果と言える。
- ・ コース別学習について児童のアンケートや感想からは、満足感や活動への意欲が高まったことがわかった。

(ウ) 評価を生かした指導について

- ・ チェックテスト(事前・事後などで実施)により、児童の基礎・基本の定着の把握ができ、コース別学習の選択のさせ方や普段の授業における個に応じた指導の工夫をすることができた。
- ・ 定期的な学力検査を年1回から、年度当初と3学期の始まりに実施することによって、児童の学力の実態がより明確になり、指導の改善に生かせるようになった。

(エ) 基礎的・基本的内容の定着を意識した指導過程の工夫について

- ・ 「100マス計算」について、全学年でほぼ毎日取り組んだが、計算が苦手な児童は計算力が高まったことが、普段の授業から感じられる。また、集中力が増してきている。

- ・ 上記以外に普段の授業で感じられることとして、難しい計算においても早さ、正確さなどの処理能力が高まってきている。

(オ) その他

- ・ コース別学習やＴＴの授業、学習への取り組みについて、児童の実態を把握するために、学習アンケートを実施した。その結果を本県の様子と比較したところ、コース別学習については7つの質問の全ての「はい」と答えた本校児童の比率が本県の比率を超えた。また、ＴＴの授業についても7つの質問のうち5つが本県の比率を超える結果となった。（別紙参照）

2. 今後の課題

(ア) ＴＴによる個に応じた指導について

- ・ 個を生かすための座席表のチェックを蓄積して、次の学習につなげるようにしているが、個人データとして整理できないままになってしまいがちである。整理することで習熟度別学習などに生かす工夫が必要である。また、データを生かすために、単元におけるより効果的なＴＴによる学習過程の工夫が必要である。

(イ) 習熟度別学習の工夫について

- ・ 習熟度別学習を実施するにあたって、その時間の空き人員が十分でなく、適正な指導者の人数を配置することが困難である。
- ・ 日常的に習熟度別学習を行っていくには、準備や打ち合わせなどを綿密にする必要があるが、そのための時間の確保が困難である。

(ウ) 評価を生かした指導について

- ・ 客観的な評価を生かして指導することが大切であるが、客観的な評価をするためには時間がかかり、俊敏な対応が難しい。
- ・ 日常的に即効的な指導を行うことを前提とすれば、少なくとも、習熟度別学習に関わる指導者はその学級の実態（児童の学習の評価）について把握しておく必要があると思われるが、共通理解するための時間を確保することは、事実上不可能に近い。
- ・ 各教科・領域の年間指導計画に個の評価を取り入れて指導を行う計画であったが、実践された指導の中で年間指導計画の個の評価がきっかけとなった実態はなく、評価のための評価となってしまう。評価・改善及び指導のための評価とするため、見直しの必要がある。

(エ) 基礎的・基本的内容の定着を意識した指導過程の工夫について

- ・ 平成15年度は指定の1年目であることもあり、「100マス計算」のみ実践し、魅力的なドリル的学習の工夫にいたることができなかった。次年度は、この部分を重視して取り組みたい。
- ・ 時間的な制約のため、もともと計算が苦手な児童について十分に伸ばすことができない。また、「100マス計算」を負担に感じる児童も中には存在している。どの児童にも達成感を持たせるには、どのような取り組みがより有効であるのかが課題である。

(オ) その他

- ・ コース別学習やＴＴの授業、学習への取り組みについて、児童の実態を把握するために、学習アンケートを実施した。その結果を本県の様子と比較したところ、学習への取り組みについては7つの質問に対し、5つの項目について「はい」が本県の比率を超えたが、「学習用具の準備」と「家庭での予習・復習」について実態として良くない状況である。また、どの質問項目でも、総合的に判断したとき良いと言えない実態である。

学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力調査の実施（年2回）
学習アンケートの実施

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- * 平成15年11月12日（水）大間町教育研究会で、大間町立小中学校教員を対象に授業公開発表
- * 平成16年度の教務主任研究協議会及び校長研究協議会において研究の概要を説明する。
- * 平成16年度の教育課程地区研究会で研究の概要を説明する。
- * 平成16年度の研究発表会（授業公開）の開催を予定。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無